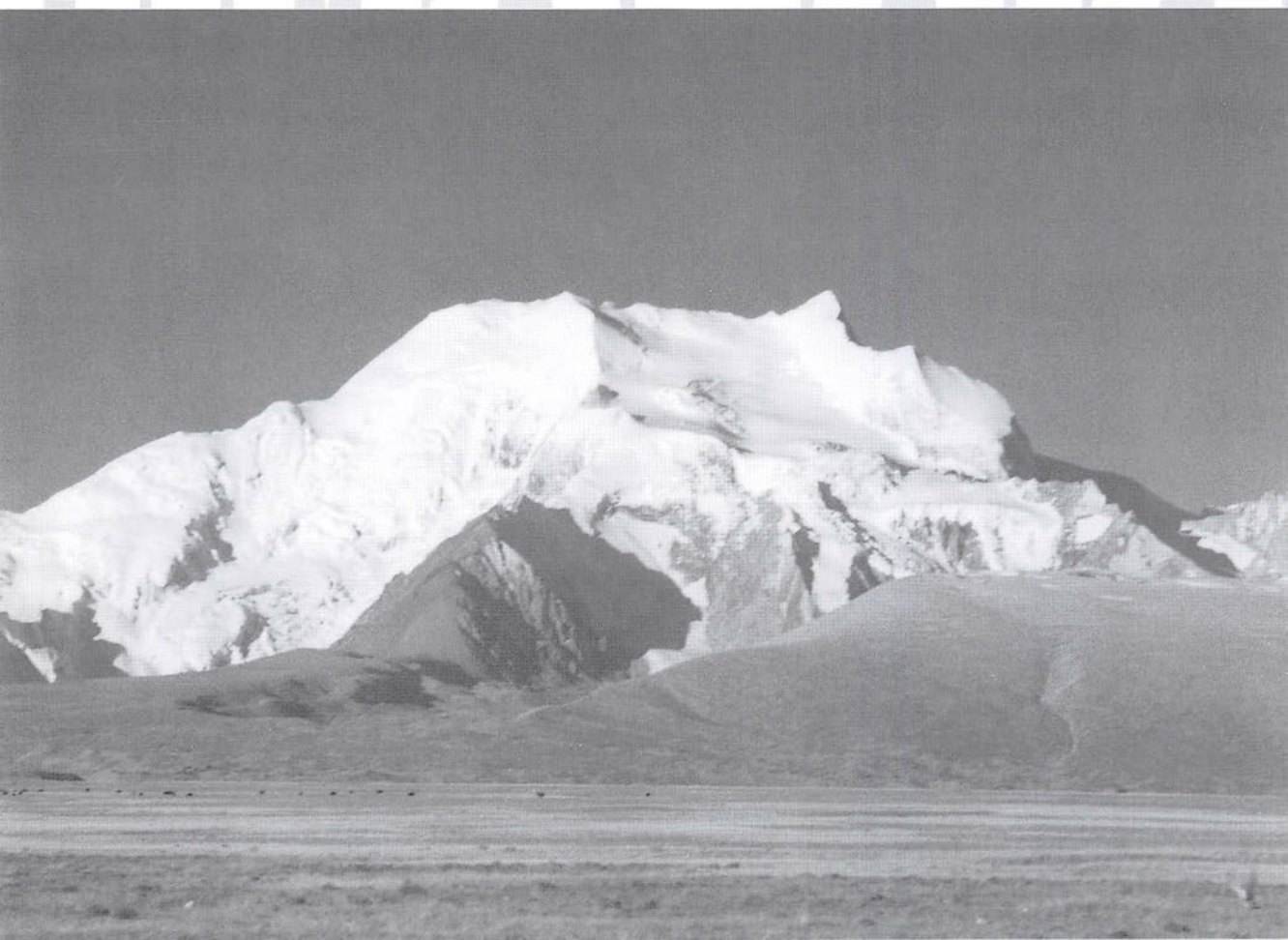


ヒマラヤ

No.378



2003 MAY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成15年度通常会員総会のお知らせ !!

日本ヒマラヤ協会平成15年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、添付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月20日までに必着するようお願いいたします。

3. 議事

- (1) 議案第1号 平成14年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成14年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成15年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成15年度収支予算について

4. その他

記

- 1. 日時 平成15年5月24日(土)午後1時～2時
- 2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぽヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋(出口A2)
から徒歩2分

表紙写真

1996年秋、ヤンラ・カンリの偵察に向かう途上シシャバンマ北麓から眼前に「カンペンチン」の雄姿が目に飛び込んできた。今夏H A Jのサマー・キャンプの舞台となる。標高7,281m。
(文と写真：山森 欣一)

ヒマラヤ No. 378

- | | |
|----------------------------------|---------|
| 1. PEOPLE | ダグ・スコット |
| 2. 新聞記事が語るヒマラヤ登山の大衆化 | 山森欣一 |
| 10. ロー・マンタンの空、遥かなり(9) | 高橋 照 |
| 15. 山岳文化学会が発足 | |
| 16. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 | |
| 18. HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集 | |
| 19. 20世紀・日本ヒマラヤ登山のまとめ(5) | |
| 20. 四川省登山の和文参考資料一覧(1979年開放以後のもの) | |
| 23. 山田昇15年祭と「白き山河の旅人」出版記念会 | |
| 24. H A J販売書籍案内 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

我国の『ヒマラヤ登山』は、1990年代に入った以降「長期衰退傾向」にあるが、(社)日本山岳協会が主催する『海外登山技術研究会』は、これに歯止めをかけるために、この数年間にボイティク・クルティカ(ポーランド)、ジャン・トロワイエ(スイス)、アンドレ・シュトレフェリ(スロヴェニア)、クルト・ディームベルガー(オーストリア)など世界的に著名なヒマラヤニストをゲスト・スピーカーに迎え、ヒマラヤ登山の活性化を試みてきた。当事者たちの思いが果たしてヒマラヤ・クライミングを目指す登山家たちに届いているのかは今のところ不明である。

2003年は、エヴェレスト初登頂50周年にあたることもあり、今年のゲスト・スピーカーに招聘されたのが、1975年秋、エヴェレストの中では最も困難と目されていた「南西壁」の初登攀者であるダグ・スコット(イギリス)である。

以下は主要ヒマラヤ登山歴である。

1941年5月29日ノッティンガムに生れた。12歳になる数週間前に登山を始めたが、奇しくもダグ12歳の誕生日にヒラリーとテンジンによるエヴェレスト初登頂がなされたのである。

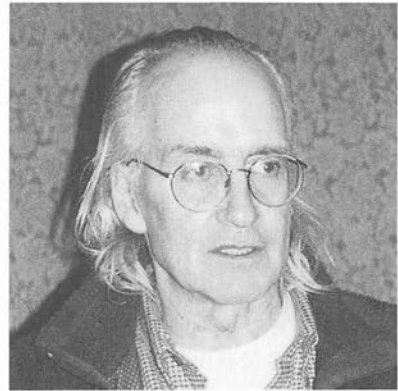
1961年、ウェールズやレイク・ディストリクトへ出掛けるのに、まとまってバスに乗るとなにかと都合がよいので「ノッティンガム・クライマーズ・クラブ」を創立した。モン・ブランで客をガイド中、ボニントン、ウィランスに出会う。

1967年、初めてのヒマラヤは、ヒンドゥ・クシュのコー・イ・バンダカー(6,837m)南壁をジャイリーズとアルパイン・スタイル(以下A Pと略)で初登攀する。

1972年エヴェレスト南西壁に春と秋挑戦。春は8,000mまで(ヘルリヒコフナー)、秋は8,300mまで(ボニントン)。

1974年、インドのチャンガバン(6,864m)をボニントン、ハストンらと初登頂。レーニン(7,134m)南東稜をクライヴ・ローランドらとA Pで初登攀。

1975年、ハストンとエヴェレスト南西壁初登攀、8,700mでビバークとなったが生還した。



1977年、ボニントンとカラコルムのバインター・ブラック(7,285m)を初登頂。

1979年、ジョー・タスカー、ピーター・ボードマンとカンチェンジュンガ(8,586m)北稜を無酸素、A Pで初登攀。今回の講演会で彼自身の登攀で最も困難であったと述懐した。同年、ネパールのヌブツェ(7,855m)北稜をアラン・ラウスと初登攀するが、雪の積もった一番高い所は逃がしたらしい。

1981年、インドの怪峰シヴリン(6,542m)東稜をグレッグ・チャイルドらと13日間でA Pで初登攀。ラインホルト・メスナーらとチャムラン稜線上の7,010m峰北壁をA Pで初登攀。

1982年、シジャバンマ(8,027m)南西壁をバクスタ・ジョーンズ、アレックス・マッキンタイアとA P初登攀。その前に偵察と順応で登山したブンパ・リ(7,400m)をA Pで初登頂。

1983年、スティープ・サスタッドとブロード・ピーク主峰(8,051m)登頂。

1984年、チャムラン北東峰(7,290m)を息子のマイクルらとA Pで東稜から初登頂し北壁を下降。

1985年、マーク・ミラーらとカラコルムのディラン(7,257m)をA Pで二日間で登頂。

1988年、ブータンのジチュ・ダケ(6,793m)をビクターらと南壁からA Pで初登頂。今回の講演会では1984年に東稜から南峰に初登攀したH A J 隊(八木原罔明隊長ら)の固定ロープがキャンプの支点として役立ったと皮肉った。

1999年、英国王立地理学会ゴールドメダル受賞。同年から昨年まで英国山岳会会長。

新聞記事が語るヒマラヤ登山の大衆化

山森 欣一

■はじめに

日本山書の会は、毎月「山書月報」を発行しており、会員の後藤傳氏が「朝日新聞」に掲載された「山岳記事」の「見出し」を毎年まとめて発表している。このような地味ではあるが基礎的な資料をまとめている後藤氏に敬意を表したい。労作である。(山森も同会の会員である)

今回は、その「山岳記事」の中から「ヒマラヤ」関係を山森の独断と偏見によって抽出してまとめ、記事数の変化から、ヒマラヤ登山の大衆化が進んでいることを裏付けようとするものである。

■時代区分

時代区分は、①1970年代(1976,79,80,81)、②1980年代(1986,89,90,91)、③1990年代(1996,99,2000,01)とした。なるべく最近のデータを優先した結果、2001年が最新であったので、各4年を時代区分の基礎とした。

■大衆化の証し?

報道記事が多いから大衆化したと言えるのか、逆に少ないから大衆化を反映しているのか。一応今回の資料をベースに考えてみると、表1の1970年代の[1981年の日本隊]の記事数98の内、「途中経過・登頂成功断念」などを報じた『結果』が48%と半数近くを占めている。これは、この年、日本から初めてヒマラヤの三大峰(エヴェレスト=明大、K2=早大、カンチェンジュンガ=HAJ)に入山し、それぞれの計画がユニークだったこともあり、八千メートル峰を中心とした報道が『結果』の半数以上を占めていた。この点では記事の多さは大衆化を示していないことになる。

一方、表4では時代の総数をみているが、日本隊の項でみると、1970年代の282に対して、80年代は、58.9%で70年代から約4割減少、90年代になると、70年代の39.7%で、70年代に比べると約6割減少しているのである。こうなると、報道側からみて「日本のヒマラヤ登山」が報道に値しな

い!との判断が働いていたに相違なく、その原因は?と考えると、課題や記録に挑戦するような登山が減っていること、やや乱暴に言えば、即ち魅力のない登山が増えた、大衆化した!とみることも可能である。

■遭難と環境

『遭難』の項で1981年の24、91年の30、96年の13が突出している。これにはキチンとした理由がある。81年は、日本のヒマラヤ登山界始めて以来の未曾有の遭難事故が多発し、12隊で34名が死亡・行方不明となったのである。91年は京都大学と中国の合同登山隊の遭難で日本11名を含む16名が行方不明となった。この関係だけで20である。96年は、春にエヴェレスト公募隊に参加して田部井淳子以来、日本人女性として二人目の登頂者となりながらも帰途死亡した難波康子関係と、秋にマナスル登頂後行方不明となった小西政継関係のためである。なお、この年、チョモランマで福岡隊とインド隊の係争があり、朝日新聞は異常にこの件について報道したが、これは『外国』に集計した。

『環境』は、基本的には一般社会の時代を反映して90年代は70年代の倍近い数字となっているのであるが、山の世界でも、1990年秋、日本で山岳4団体(日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、HAJ)が協力して立ち上げた「HAT-J」が、ヒマラヤの自然保護の方法を解説した「テイクイン、テイクアウト」のテキストを作成し啓蒙したことにより、様々な活動が出始めたことによる影響も無視できないところである。

■おわりに

新聞社も営利企業なのだなあ、と思いたくなる記事が沢山見受けられた。何故こんな記事が!とか、これが載っているのに、あれがない!等々。時代時代を担当した記者のレベルが歴然と現れているのかも知れない。

[朝日新聞記事] ヒマラヤ登山関係集計表

2003年3月6日・山森欣一作成

この集計表は「日本山書の会」誌上に、後藤傳氏が『山岳記事（朝日新聞）』として発表された記事の中から筆者の独断で「ヒマラヤ関係」として抽出整理した記事を集計したものである。

[総数＝記事の年間総数] [外国＝外国隊や外国人の記事数・％は総数に占める割合] [日本＝総数から外国を差し引いた記事数・％は総数に占める割合] [内訳は『日本』の記事の中の分類で、％はいずれも『日本』に占める割合] [挑戦＝登山隊派遣記事] [結果＝登頂成功、断念、途中経過記事] [遭難＝遭難記事、遭難を伴う成功と断念も含む] [環境＝ゴミ、清掃を含む] [『日本』と『内訳』の差は『その他』であるが、ここには表示されていない。]

[表1] 1970年代

		総数		外 国		日 本		挑 戦		結 果		遭 難		環 境								
年 度 別	1976	8	7	2	2	25.3%	6	5	74.7%	1	1	16.9%	2	4	36.9%	4	6.2%	4	6.2%			
	1979	6	3	1	5	23.8%	4	8	76.2%	7	14.6%	2	0	41.6%	8	16.7%	0	0.0%				
	1980	9	7	2	6	26.8%	7	1	73.2%	1	5	21.1%	3	0	42.3%	4	5.6%	3	4.2%			
	1981	1	2	1	2	3	19.0%	9	8	81.0%	1	0	10.2%	4	7	48.0%	2	4	24.5%	0	0.0%	
	合計	3	6	8	8	6	23.4%	2	8	2	76.6%	4	3	15.2%	1	2	1	42.9%	4	0	14.2%	7

[表2] 1980年代

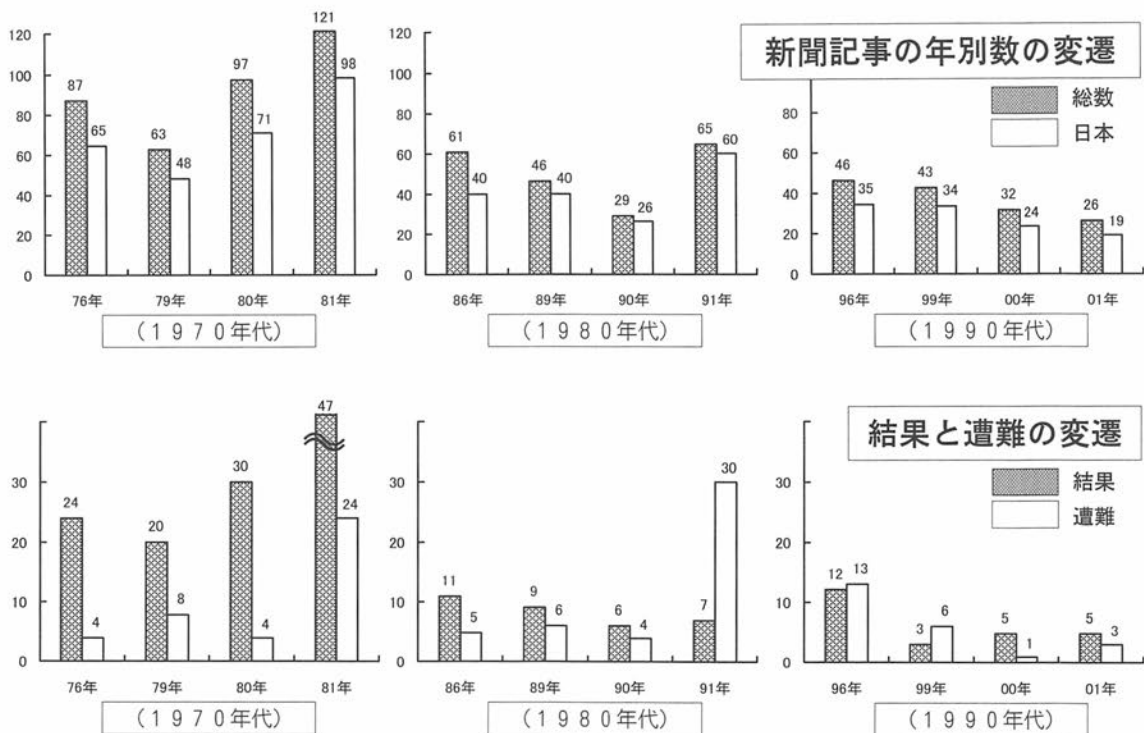
		総数		外 国		日 本		挑 戦		結 果		遭 難		環 境								
年 度 別	1986	6	1	2	1	34.4%	4	0	65.6%	6	15.0%	1	1	27.5%	5	12.5%	3	7.5%				
	1989	4	6		6	13.0%	4	0	87.0%	4	10.0%		9	22.5%	6	15.0%	0	0.0%				
	1990	2	9		3	10.3%	2	6	89.7%	2	7.7%		6	23.1%	4	15.4%	3	11.5%				
	1991	6	5		5	7.7%	6	0	92.3%	3	5.0%		7	11.6%	3	0	50.0%	7	11.7%			
	合計	2	0	1	3	5	17.4%	1	6	6	82.6%	1	5	9.0%	3	3	19.9%	4	5	27.1%	1	3

[表3] 1990年代

		総数		外 国		日 本		挑 戦		結 果		遭 難		環 境								
年 度 別	1996	4	9	1	4	28.6%	3	5	71.4%	2	5.7%	1	2	34.3%	1	3	37.1%	2	5.7%			
	1999	4	3	9	20.9%	3	4	79.1%	4	11.8%	3	8.8%	6	17.6%	5	14.7%						
	2000	3	2	8	25.0%	2	4	75.0%	4	16.7%	5	20.8%	1	4.2%	5	20.8%						
	2001	2	6	7	26.9%	1	9	73.1%	5	26.3%	5	26.3%	3	15.8%	1	5.3%						
	合計	1	5	0	3	8	25.3%	1	1	2	74.7%	1	5	13.4%	2	5	13.4%	2	3	20.5%	1	3

[表4]

		総数		対表1		対表2		外 国		対表1		対表2		日 本		対表1		対表2	
表1		3	6	8				8	6	23.4%				2	8	2	76.6%		
表2		2	0	1	54.6%			3	5	17.4%	40.7%			1	6	6	82.6%	58.9%	
表3		1	5	0	40.8%	74.6%		3	8	25.3%	44.2%	108.6%		1	1	2	74.7%	39.7%	67.5%
合計		7	1	9				1	5	9	22.1%			5	6	0	77.9%		



[朝日新聞記事] ヒマラヤ登山関係例

1981年 (*印は夕刊)

	月日	記 事
1.	1/ 1	植村隊苦闘 厳冬のエベレスト
2.	1/ 9	バルンツェ峰第二登は失敗
3.	1/13	エベレストで転落死 植村隊の竹中隊員
4.	1/19	登山継続を決める 隊員遭難の植村隊
5.	1/22	24日にも頂上攻撃 エベレスト植村隊
6.	1/25	荒天で計画再検討か エベレスト植村隊
7.	1/29	植村隊 烈風で断念
8.	1/31	同時アタック 世界三大峰 (エベレスト=明大、K2=早大、カンチェンジュンガ=日本ヒマラヤ協会)
9.	2/ 7	ヒマラヤに32隊挑戦
10.	2/ 8	厳冬の登頂非常に困難 断念の植村氏
11.	2/12	英国隊も断念 厳冬のエベレスト
12.	2/15	植村隊が帰国
13.	2/19	「労山」8000メートル級初挑戦 チョー・オユー 未踏の東壁
14.	2/20	エベレスト完登へ 明大隊きょう出発 難ルート西稜から挑戦
15.	2/24	坂下氏登頂を断念 アンナプルナI峰
16.	2/26	明大隊ラムサンクに到着
17.	2/26	日本の三登山隊が中国入り

18.	2/28	貴重な雪の結晶など ヒマラヤの北大隊持ち帰る
19.	3/18	「幻の山」シシャパンマ 女性隊 初の挑戦
20.	4/ 8	早大隊の壮行会開く K 2 に西稜から挑戦
21.	4/10	ベースキャンプを日本の三隊が設営 ネパールヒマラヤ各峰
22.	4/11	カンチェンジュンガに登りたい人 メスナーが世界各国の登山家に呼びかけ
23.	4/13	中国領ヒマラヤにラッシュ 解禁二年目 日本から15隊など
24.	4/14	ベースキャンプ入り 明大エベレスト隊
25.	4/21	中国の登山家が来日 10人長野県で技術訓練
26.	4/23	明大隊C 1 設営 エベレスト 米中合同隊が挑戦 チベットの未踏のモラメンチン
27.	4/30	カンゲール登頂に成功 岳友会隊
28.	5/ 4	日本二隊が登頂成功 (バルンツェ=千葉大隊、ランタン・リルン=群馬労山隊)
29.	5/ 7	日本女子隊 シシャパンマ征服
30.	5/ 7	交差縦走に変更 カンチェンジュンガ ヒマラヤ協会隊
31.	5/ 8	あすにも登頂 ヒマラヤ協会隊
32.	5/12	カンチェンジュンガ主峰・西峰 日本隊大量11人で登頂 雪深く交差縦走は断念
33.	5/12	マカルーに単独登頂 オーストリア人
34.	5/13	明大隊西稜の難関突破 エベレスト
35.	5/15	62歳マナスルに立つ 西独隊員 史上初めて
36.	5/18	ヒマラヤ遠征八人死ぬ 北海道岳連隊 ミニヤコンカ
37.	5/18	ガネッシュ 3 峰登頂を断念 日大・ネパール合同隊
38.	5/21	エベレスト波状アタック 明大隊
39.	5/23	豪州隊 アマ・タブラムに登頂
40.	5/23	あと96メートルで断念 エベレスト明大隊
41.	5/26	アムネマチン初登頂成功 上越山岳隊
42.	5/26	ロープに七人……次々と全員転落 ミニヤコンカの遭難
43.	5/27	モラメンチン初登頂 ニューゼaland隊
44.	5/27	* 日本隊員今度は急病 インド空軍がヘリで救助 クン峰
45.	5/29	直後七人は滑落した。ミニヤコンカ北海道隊遭難
46.	5/29	難ルートだが自信 早大K 2 登山隊長
47.	5/30	* パミールの未踏峰めざす 学術探検一日出発
48.	6/ 1	再びマナスル登頂 西独隊
49.	6/ 1	チョー・オユーの登頂失敗 日本隊
50.	6/ 3	メスナー シシャパンマ登頂に成功
51.	6/ 5	明大隊 勇気の撤退 エベレスト頂上まで98メートル
52.	6/13	ボゴタ初登頂に成功 隊員一人は犠牲に 京都山岳会隊
53.	6/15	* 単独無酸素で初登頂 ダウラギリ 名古屋の禿さん
54.	6/18	ネパール政府から登頂証明書もらう
55.	6/20	「危ない！助けないで」遭難女性の最後明かす ボゴタ山
56.	6/21	義足で征服した6600メートルの高峰 ホワイト・ニードル
57.	6/27	ダウラギリ I 峰登頂の証拠
58.	7/12	早大隊 BC 設営 K 2

59.	7/15	* ヒマラヤ高地60日の放浪
60.	7/16	* クン峰西壁を征服 日本隊
61.	7/16	* 中国領コングール 日本隊に先がけ 英国隊が初登頂
62.	7/19	カラコルム明暗 初登頂と三人死亡と 関西の登山隊
63.	7/23	* ヒマラヤ遭難の関西の登山家アラスカでも遭難か
64.	7/26	ヒマラヤ登山の元締め S. R. シャルマさん
65.	7/28	兄弟隊員が8000メートル峰登頂に成功 ガッシャーブルム 2 峰
66.	8/ 3	中国の未踏峰 同大が登頂
67.	8/11	K 2 など四峰開放 中国登山協会
68.	8/12	ヒマラヤでも遭難 女性隊員高山病で死ぬ
69.	8/12	* 邦人三人消息絶つ コングール峰登頂中
70.	8/13	遭難の三隊員 現地で慰霊祭 コングール登山隊
71.	8/14	またヒマラヤ遭難 無許可の学習院大生
72.	8/16	K 2 西稜ルート初登頂 早大隊
73.	8/17	ヒマラヤの二峰登頂 長野隊・千葉工大隊
74.	8/18	ムスターグ・アタ北峰初登頂に成功 川崎市教員隊
75.	8/18	アムネマチンにも登頂 峠山岳会
76.	8/18	* 無許可登山でインドが捜査 学習院大生の遭難
77.	8/19	アンナブルナ南壁の未踏稜 邦人隊無酸素挑戦
78.	8/20	コングール・チュピエ峰 防衛大隊が登頂
79.	8/22	* 遺体引上げ収容 氷河転落の香椎さん
80.	8/28	海外で相次ぐ 日本登山隊の遭難
81.	8/29	壮絶だった K 2 登頂
82.	9/ 3	邦人登山家が不明 クン峰
		中国側から K 2 へ挑戦 日本山岳協会隊
83.	9/ 5	不明の松本隊長無事救助 クン峰
		日本山岳会学生部 ボコダ峰に登頂
84.	9/ 6	20人は立てるぞ K 2 頂上
85.	9/16	K 2 苦闘の無酸素登頂 早大隊の輝く足跡
86.	9/25	日本人ら四人死ぬ ヒマラヤ
87.	9/25	* 北海道の女性隊か ヒマラヤ遭難
88.	9/27	ヒマラヤまた遭難? (ホワイトセール峰一橋大の三人不明、死亡の三人は旭川の女性 ジャオンリ峰)
89.	10/ 1	ヒマラヤ秋季もラッシュ 大団日本は14隊
90.	10/ 3	* 地上の捜索打切る 一橋大隊の遭難 ホワイトセール
91.	10/ 4	ヒマラヤまた邦人遭難 雪崩か七人不明
92.	10/ 6	明大隊二人も遭難 ネパール
93.	10/ 7	遭難続くヒマラヤ 仏・ポーランド隊も
94.	10/ 8	チェコ隊ナンダデビに登頂
95.	10/16	大阪の隊員が滑落して死ぬ アンナブルナ峰
96.	10/19	ランタン・リに初登頂
97.	10/19	* 八千メートル峰三度足下に 日本人初の快挙

98.	10/21	隊員負傷でニルギリ南峰断念
99.	10/22	もう一人いた八千メートル男
100.	10/23	25日にも頂上挑戦 アンナプルナ南壁隊
101.	10/23	エベレストに米国隊が登頂
102.	10/24	ガネッシュ3 処女峰征服
103.	10/27	未踏のド峰に法大隊が登頂
104.	10/27	米国隊登頂を断念 チョモランマ東壁
105.	10/27	仏の隊長が転落死 カンチェンジュンガ
106.	11/ 2	ヒマルチュリを断念 日本大学登山隊 マカルーに単独登頂 ポーランド・英国混成隊
107.	11/ 3	アンナプルナ最難関ルート“雪男”隊苦闘の初登頂
108.	11/ 7	二次隊員が転落死 アンナプルナ イェティ同人隊
109.	11/17	ピーター氏ら五人のニュージーランド隊が初のヒマラヤ徒歩縦断に成功
110.	11/20	*「日本人遭難は不運」テンジン・ノルゲイさん
111.	11/21	*熟年がヒマラヤ登頂
112.	11/24	処女峰三峰征服キラール 日本隊 81年秋季ネパールヒマラヤ登山終わる
113.	11/28	禁断の山（上）チョゴリ踏査報告 秘境への道
114.	11/29	禁断の山（下）チョゴリ踏査報告 最悪のルート
115.	12/ 3	ソ連隊エベレスト南西壁の未踏ルートに挑戦
116.	12/ 7	ナンガパルバットの冬季登頂を断念 山学同志会隊
117.	12/ 7	*エベレスト初登頂はマロリー氏か 中国山岳界幹部が発言 北面頂上下に遺品
118.	12/28	カナダ隊三人厳冬期初登頂 アンナプルナ4峰

1991年

	月日	記 事
1.	1/ 1	ヒマラヤ気象ロボット 七〜八千メートル級山頂に九基 日本山岳会支部など計画
2.	1/ 7	「世界の屋根」で偏西風の動きキャッチ 気象ロボット
3.	1/ 9	京大隊11人連絡絶つ 中国との合同隊五日間 梅里雪山
4.	1/ 9	*不明の京大隊 総隊長ら北京へ出発 テントの三分の二雪に埋まる 梅里雪山キャンプ
5.	1/10	不明の京大隊 総隊長ら北京で情報収集
6.	1/10	*山崩れの跡発見 不明の京大隊
7.	1/11	京大隊の搜索難航 雪崩か地滑りの可能性 救助隊員が現地に到着
8.	1/12	「生存なお期待」救援隊あすにも中国へ 遭難京大隊
9.	1/12	*京大隊搜索第一キャンプ手前まで到着 中国側は緊急指揮本部設置
10.	1/13	日本側救援隊きょう中国へ 中国隊員の家族昆明で情報待つ
11.	1/14	*悪天候続き搜索中断？ 中国の京大隊不明
12.	1/17	不明隊員のザイル発見 梅里雪山救援隊
13.	1/21	第二キャンプへ 京大隊搜索の先遣隊
14.	1/24	*救援隊第二陣昆明を出発 日中登山隊の搜索

15.	1/26	京大中国隊の17人絶望 雪崩の危険搜索を打ち切り 京大側発表 自然の猛威「望み」絶つ 京大登山隊搜索打ち切り「残念」と総隊長 未知の魅力に落とし穴 京大隊全員登頂狙い終結か 悪天候続きも誤算
16.	1/28	カメラ・フィルム発見 京大隊遭難 第一キャンプから
17.	1/28	* 京大隊の遭難
18.	2/ 7	白いツメ跡 京大隊のんだ? 雪崩写真公開
19.	2/19	* 世界最高峰へ身の丈だけで挑む 39歳ふたりだけ
20.	3/21	ヒマラヤにすす含む雪
21.	4/24	京大隊遭難現地に
22.	4/25	ローツェ登頂への疑問に反論 トモ・チェセンさん (31歳) やっかみ半分でケチ
23.	5/23	米国隊がエベレスト登頂
24.	5/29	カンチェンジュンガに日印合同隊が登頂成功
25.	5/31	* チョモランマ登頂後に不明 岩手の会社員
26.	6/ 1	* チョモランマ遭難「身の丈登山」が暗転
27.	6/11	落石・雪崩登頂を断念 明大チョモランマ隊
28.	7/ 1	ゴミ捨てる隊追放だ ナンダデビー
29.	7/ 5	パキスタン・トリボール峰 早大隊が北面初挑戦 長い稜線に夏アタック
30.	7/25	ヒマラヤの高峰 ブロードピーク 東農大隊が登頂
31.	7/30	ヒマラヤ中高年登山時代へ
32.	8/17	ブロードピーク 全員登頂果たす 東農大隊が帰国
33.	8/24	シュルパ族の女性が主役に転じ 17人の国際隊を率いてエベレストへ
34.	9/ 1	ゴミだらけじゃ世界最高峰が泣く エベレスト大掃除登山隊
35.	9/ 4	北面稜からK2初登頂 フランス隊
36.	9/13	トリボール峰 早大隊が登頂
37.	9/20	未踏の最高峰7782メートルに挑む 日中合同で11日征服へ 日本山岳会隊出発
38.	9/24	* ヒマラヤで二人死亡 長野の登山家雪崩に遭い シンジャパンマ
39.	9/26	トリボール峰登頂記 早大隊
40.	10/ 7	スペイン隊エベレスト登頂
41.	10/12	* ゴミに泣くヒマラヤ「救出」クリーン作戦
42.	10/13	再度ブータン踏査へ 千葉大山岳部 地図の空白部に挑戦
43.	10/14	ヒマラヤで邦人死亡 マカルー下山中
44.	10/15	* 長谷川恒男さん遭難死 ヒマラヤ登山中に雪崩
45.	10/16	悲報追い最後の便り 遭難長谷川さん本社に 限られた未踏峰求め続け……長谷川さん43歳の悲運
46.	10/17	ヒマラヤ未踏峰で雪崩 大西隊員が死亡
47.	10/22	気象ロボット設置に成功 ヒマラヤ標高5816メートル
48.	10/24	長谷川さんヒマラヤの丘に眠る
49.	10/28	ヒマラヤ埋葬遺髪だけ帰国 遭難死の長谷川さん
50.	11/ 3	ヒマラヤの秘境13地区「外国人山男」に開放 ネパール
51.	11/ 8	エベレスト登山「五年間禁止を」初の登頂者ヒラリー卿が提案
52.	11/11	* 登山も「環境にやさしく」の時代 エベレスト山頂のゴミ清掃へ国際隊
53.	11/15	ヒマラヤは「邦人トレッカー」ラッシュ

54. 11/15 *「夢」始動 ヒマラヤに気象観測ロボット
55. 11/18 千葉大隊が初登頂成功 ブータンのツェンダカン主峰
56. 11/23 日中合同隊がまた挑戦断念 ナムチャバルワ
57. 11/25 ナムチャバルワ峰 荒天続き登頂断念
58. 11/28 ヒマラヤ未踏峰征服の千葉大隊 肌刺す烈風やむ幸運
59. 12/ 6 *ヒマラヤ仲間
60. 12/ 9 有名峰集中に訣別を
61. 12/29 厳冬期初登頂目の群馬隊 エベレスト南西壁

2001年

	月日	記 事
1.	2/17	エベレスト70歳制覇へ 三浦雄一郎さん
2.	2/18	82歳でヒマラヤに「太古の命」を探す日本画家 堀文子さん
3.	2/24	ローツェ南壁に挑む 12月日本山岳会東海支部 冬は未登攀
4.	3/ 7	障害者相次ぎエベレストへ 盲人、片足の登山家
5.	3/ 8	登ったぞ夢の頂上 高校生が5千メートル級のヒマラヤ登山成功 国際清掃登山隊結成 下旬にエベレストへ
6.	3/16	聖なる「ネパールのマッターホルン」マチャプチャレ解禁か
7.	4/21	右京さん夢は最高峰 今秋8000メートル級登頂を計画 エベレスト目標に
8.	4/30	中高年登山 ルーツはマナスル登山
9.	5/ 1	*エベレスト最短登頂 シュルパ滑落死
10.	5/ 4	チベット未踏峰登頂 日中大学生連合隊
11.	5/17	九未踏峰を解禁 ネパール観光相
12.	5/18	「秘峰」カイラス 中国登山許可
13.	5/19	英雄シュルパ 山で逝く
14.	5/25	15歳 チョモランマ制覇 最年少記録二歳更新
15.	6/ 7	カイラス登山許可なく断念 スペイン隊
16.	8/17	*義足で最高峰へ エド・ホマーさん (45)
17.	9/15	ブータンの未踏峰 千葉大登山隊挑む 24日に出発
18.	9/18	エベレスト登山 今秋は申請ゼロ
19.	9/21	ヒマラヤの頂に リストラの52歳 日本人初登頂
20.	9/22	最高峰テントのナゾ
21.	10/ 9	片山右京さん8200メートル峰登頂 チョー・オユー
22.	10/15	*マナスル 邦人遭難死 勤労者登山連盟 下山中隊長も凍傷
23.	10/17	マナスル遭難の隊長ら三人下山
24.	10/24	*ダウラギリ 三邦人不明 群馬みやま山岳会
25.	10/31	千葉大登山隊が未踏峰登頂断念 ブータン・ヒマラヤ

パキスタン観光省の新住所

《登山局》11th Floor Enclave Trust Building (Green Tower) Adjacent to UBL Building Near
China Chowk Blue Area, Islamabad 電話：92-51-9202347 FAX：92-51-9203509
《観光局》7th Floor 住所は同じ 電話：92-51-9203772 FAX：92-51-9223013

ロー・マンタンの空、遥かなり(9)

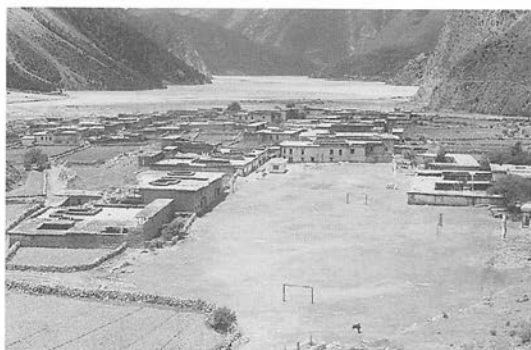
カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

タカリのことなど

高橋 照

今日は5月1日、トゥクチェの朝はさわやかに晴れ上がっていた。隊員やポーター達は、ジョムソム目指して出発して行った。TBSのスタッフとケサン・ナムギャル氏、金子さん達と朝食後、ブッディ・バードルの案内でハルカマン・スッパの廃屋に出向いた。ハルカマン・シェルチャンがスッパをしていた明治の初期、河口慧海師が単身チベット潜入を試み、トゥクチェのハルカマン・スッパの家に旅装をとき、暫く滞在したことがあった。TBSの人達は慧海師の泊った部屋の跡や、甚大な仏典を取材する予定でいた。ところが、ハルカマンの廃屋の鍵を預かっている男が、今トゥクチェを留守にしていることが判り、そのそばにあるタカリのゴンパに行くことになった。ゴンパはタシチョエリン寺 (bkra sis chos glin) といわれ、俗称はネパール語でラニ・ゴンパ (rani 王妃) といわれ、創建時はカーギュ派の寺であったが、現在はハルカマン・スッパの廃屋にあるゴンパを守っていたタカリの二人の尼僧が管理していた。私にとっても、二人の尼僧はもう十年ぐらい前から知っている。

ゴンパの中に入ると、正面にパドマサムバヴァの像があり、無数の像や仏像があり、壁面全体に



▲トゥクチェ全景

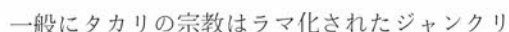
はパトサムバヴァや仏陀の諸々の猊爛たる壁画が画かれていた。堂の右端には、カルマ派の祖師像が安置されているので、永い年代の間にカーギュ派よりカルマ派に変わったのかも知れない。

中庭にはそれ程古いものとは思われないが、チベット語が刻まれた鐘があった。ケサン・ナムギャル氏はタカリの宗教に何時頃から仏教(ラマ教)が入って来たか、その手がかりが掴めるかも知れないといって、ノートにチベット文字を丹念に書き写した。そして、時々金子さんと何か話し合っていた。金子さんはスネルグローブは寺の鐘に碑文があることを記しているが、文面については何も報告していないので、この碑文は日本に帰ってからゆっくり解読するといっていた。

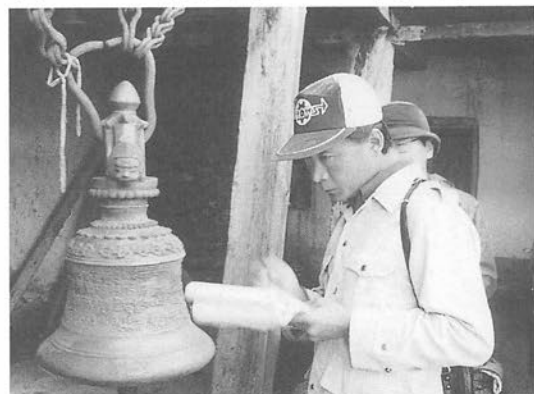
このタック・コーラのタカリのゴンパについては、拙著「ネパール曼陀羅」に書いてあるので詳しくは述べないが、このトゥクチェの手前のコバング (kopang チベット名 rnal rdzon) と、トゥクチェ周辺の寺は、スネルグローブやトッチィが報告している。又、コバングのそばのタグルング (Taglung, チベット名 rtag Lun) にもタカリの寺があるが、皆一様にグル・パドマサムバヴァ (Gur Padmasambhava) を祭ってあるのに興味を引く。パドマサムバヴァはブータン、シッキム、インド、ネパール (タック・コーラ、ドルポ、ロー等) チベットの各所にその足跡を残している。彼がネパールを通過したであろうことは、色々の文献で明らかにされている。日本の高野聖の伝承に良く似たところがあるようだ。

仏の加持した聖なる山ムリカンリンチェン (mulikans rin chen, ドウラギリ山) に、阿闍梨パドマの成就窟と成就水、手跡、足跡があるといわれている。ダルの秘密窟は、パドマサムバヴァが

しかし、この十年間でタック・コーラや、カク、ロー地区で散見した中でも、厳しい自然条件の中に、牧畜、農業、商業を含めた人々の生活にある



▼ラニゴンパの鐘とケサン・ナムギャル氏



ではないかといわれているが、これは明らかに、ジャンクリに後世になって仏教が入り込み、それにボン教が加わってラマ教化して来たものと思われる。私の目には、少なくともこのゴンパに関しては仏教（ラマ教）という印象が強かった。しかし、タカリの中にはジャンクリのようなシャーマニスティックな呪詛も現在あることはある。タカリの家の中央の部屋の奥に鍵のかかった部屋があるが、そこは聖所になっていて、タカリ以外の人は近づけないのだ。祭器を見るとジャンクリのものであるようにも思えるが、あるいはボン教の影響を受けているようにも思われる。

私はレテのバターチャンの家で、ジャンクリの悪魔払いの秘儀を見たことがある。その時はたまたまジャンクリが不在だったので、ボンクリ（Bon-po）の僧侶を呼んで祈祷してもらっていた。毎年11月か12月、つまり陰暦の第一月の満月（ブルニマ）の夜に、ジャンクリを呼んで悪魔払いをしてもらうのだそうである。

しかし、チベットとインドを結ぶ仲介貿易が盛んになり、インドに南下する機会が多くなるにつれ、タカリの四氏族共通の最高神として、ヒンドゥの富の女神であるマハ・ラクレミー・デヴィを迎えているのは面白い。これは、タカリが業務上の理由から、インド近くのタライ地方では、俺の宗教はヒンドゥ教で、あんな汚いラマ教徒とは違うと言い、チベット側では、俺の宗教はラマ教で、南のヒンドゥ教徒とは訳が違うと言っているのだ。とすると、ごく自然な考えとして、ヒンドゥでもラマでもない、全く別な彼等独自の密教を持っているのかも知れない。これをさぐり当てるには、

タカリ達がタック・コーラに流れついたコースを逆に辿って、ジウムラ・シンジャまで行く必要があるだろう。

若い人の中では、タカリは西ネパールのジウムラとシンジャのシンジャ・バレーのヒンドゥ教徒のトクーリー（Thakuri）だともいわれている。

タカリがタック・コーラ地方に定着した歴史はあまり長くなるので、ここでは述べないことにするが、タカリについては拙著「ネパール曼陀羅」（東京新聞出版局）の中の「タック・コーラで拾った話」を参照していただきたい。

しかし、最近気がついたことは、私の友人でシンジャパティという警察のインスペクターがいる。カーストはチェットリーであるが、その先祖をたどれば、シンジャ・バレーのラージャの後裔である。彼の容貌が不思議とタカリの容貌と一致しているのは、私にはとても興味がある。或いはタカリは、シンジャ・バレーのチェットリーやトクーリーと関係あるという証言は当を得ているかもしれない。シンジャ・バレーのラージャの氏性はシンジャパティ（Sijapati）である。

タカリがジウムラ・シンジャよりタック・コーラにやって来たという伝説や、ドルポ地区のボテが、実はボテとインド・アーリヤン系であるトクーリーなどとの混血だと前に一寸述べたが、その外にムグ地区やフムラ地区に住むボテだと思われる種族が本当はバウンやチェットリーやトクーリーであったりしていることは、本文とは余り関係のないことであるが、これから出てくるムスタンの純粋なボテや西ネパールに居るピュア・チベタンについて、彼等がどのような経路で入って来たかをさぐりだす一つの手だてとして、西ネパールの全土に広がって住んでいる、チベット経由で西ネパールに入ってきた、インド・アーリヤン系の情報を辿るのも案外無駄なことではないであろう。

西ネパール地方でガルカ（Garkha）と言われている一つのグループ組織がある。ガルカとはガウン（Gaun）即ち村で、しかも一つのグループだけが住んでいる集落のことである。このガルカはクマオン語（Kumayon）である。

先ず西の端から列記しよう。

『ダルチュラ地方 (Darchura)』

マルマ・ガルカ (Marma Garkha)
レーコム・ガルカ (Lekam Garkha)
ゴクレー・ガルカ (Gokule Garkha)
ビヤース・ガルカ (Vyas 又は、Byas Garkha)

『ドーティ地方 (Doti)』

フォルシール・ガルカ (Phorsil Garkha)
ジョライル・ガルカ (Jorail Garkha)
ワイル・ガルカ (Wail Garkha)

『バジャーン地方 (Vajhan)』

チャンナ・ガルカ (Chhanna Garkha)
デーワル・ガルカ (Dewal Garkha)
ドゥリ・ガルカ (Dhuli Garkha)
ブンガル・ガルカ (Bungal Garkha)

等である。この中のグループで、ビヤース・ガルカのビヤシー (ビヤースの人) だけが、純粹の西藏族で、あとは全部インドのラージャ・スタンよりムガル王朝に追い上げられ、チベット (北方) 経由で西ネパールに入り込み定着した種族で、トクラー、チュットリー、バウン、ダマイなどのすべてのカーストである。バジャーン地方のドゥリ・ガルカはビヤシーが少し混じっている。

ビヤース・ガルカのビヤシーは、ガルワル語とクマオン語を使い、チベット語を使っていない純粹の西藏族 (ボテ) である。ネパールの西北端 (アピ付近) のティンカールの谷 (リプー) に住んでいるビヤシーは、インドのマルワリのようなビジネス・マンでしかも皆金持ちである。ビヤシーはティンカール・リプー以外のチベットのタクラコットやマナサロワール湖地方にも住んでおり、インドやウイグル自治区との交易などを行っている交易民族でもあり、これ達も皆金持ちである。ネパール国境よりマナサロワールまでのタクラコットの谷は、彼等が経済権を握っているので、この地方の物価は物凄く高いようだ。このチベット側のビヤシーも、ネパール側のティンカール・リプーのガルカと同様ピュアー・チベタンである。

話は大部わき道にそれて恐縮だが、これから西ネパールのムスタン地区以西を旅行するには必要な情報だと思うので述べたまでのことなのでご容赦願いたい。

▼トックチェ、タカリのゴンパ内の壁画



このトックチェの町について、少しばかりの説明を補足させていただきたい。

トックチェはタカリ族の本拠で、その昔、チベットとインドの仲介貿易を一手に専有して、商業民族としてタカリの経済的基盤を不動なものに位置づけをした中心的役割をした集落である。タカリは多民族国家のネパールの中ではかなりの少数民族である。人口は一万とも一万五千ともいわれているが、これは広範囲のタカリ族の数字であって、タカリは四つの氏族だけが純粹なタカリで、あとはタカリではないという。四つの氏族の人達の話の本当だとすると、タカリは高々四千人そこそこということになる。

この四つの氏族とはシェルチャン (Sherchan)、ゴウチャン (Gauchan)、トゥラチャン (Tulachan)、バッターチャン (Bhattachan) で、タック・コーラの13カ村 (テラ・ガウン) に住んでおり、所謂「タック・サート・サエ (Thak-sat-sae タック七百)」と呼ばれているように、七百の家に住んでいたことを指している。



▲トックチェ、タカリのゴンパ内の仏像

▼トゥクチェ旧道のマニ車



このほかに、一般にロー・カーストのタカリと
言われている、ヒラチャン (Hirachan)、ジュハル
チャン (Juharchan)、パンナチャン (Pannachan)、
ラルチャン (Lalchan) の氏名を持った種族は、
五カ村 (パンチ・ガウン) に住んでおり、前記の
純粹だという四つの氏族と、タカリではないとい
う所謂ロー・カーストのタカリとハッキリ区別し
ている。

純粹なタカリの住む十三カ村 (テーラ・ガウン、
又は、タック・サート・サエ、旧い言葉ではタッ
ク・サッ・セツ) とは、

- (1) ガーサ (Ghasa)
- (2) レテ (Lete)
- (3) ドゥムプー (Dhumpu)
- (4) ターグルング (Taglung)
- (5) コンチャー・ターグルング (Konchha Taglung)
- (6) ノウリコット (Naurikot)
- (7) ラルジュング (Larjung)
- (8) コーバング (Kobang)
- (9) カートン (Khant)
- (10) トゥクチェ (Tukuche)
- (11) ナークンブ (Nakung)
- (12) ブーティング (Butigang)
- (13) ティティー (Titi)

である。

その北方に位置するパンチ・ガウン (五カ村)
とは、

- (1) ジョムソム (Jomsom 旧都はティニー Thini)
- (2) シャン (Syang)
- (3) マルフア (Marpha)
- (4) チヴァン (Chivang)

(5) チェロク (Chherok)

で、ここには所謂ロー・カーストのタカリと一般
に言われている種族が住んでいる。

純粹だと自称する四つの氏族 (クラン) を代表
するのは、少なくとも19世紀以降はシェルチャン
氏族だと思う。それはシェルチャン家がスッバ
(Subba 徴税官) の称号を受け、時のラナ將軍よ
りチベットとインドの仲介貿易の専売権を得てい
たことでもうなずける。

19世紀中頃の1855年、二回目のネパールとチベッ
トの戦争の際、初代のシェルチャン氏 (スッバ・
バルビール) がおおいに活躍した。両国の戦争は、
一回目は1792年に起こったが、ネパール軍が敗北
した。二回目の戦いは両軍が激しく戦いを続け、
たがいに武器弾薬を使い果たして、くたくたに疲
れ果ててしまった。そのとき初代シェルチャン氏
が両軍の仲裁の労をとって、この地域でのネパ
ール軍を勝利に導き、その結果両国の戦いはネパ
ール軍に勝利をもたらしたのであった。それ以来、
ネパールの王政復古の前年まで、チベットはネパ
ールに毎年一万ルピーの貢物を献上していた。こ
うしたいきさつから、シェルチャンはじめタカリー
族は、チベットのラサまで行くにも、チベット政
府から旅行のための食糧、人夫、駄獣などの供給
を受け、楽に交易することができた。当時チベッ
ト政府の発行した証書が現在でも残っているが、
ネパール人でチベット政府から証明書をもらった
のはシェルチャン一族だけである。

タカリの交易の相手はドルポ地区もあったが、
主力はムスタン地区とチベット地方であった。こ
の仲介貿易とトゥクチェに於ける通関業務からタ
カリー族に落ちる金は莫大なものであった。シェ
ルチャン一族は当時のラナ政府に対し、当時の金
で年額十二万ルピーを納めていたということであ
る。ちなみに当時の貨幣価値は一ルピーが二モー
ルで、直径2.5センチぐらい、重さにして五グラ
ムのモハール金貨二枚である。したがって十二万
ルピーはモハール金貨二十四万枚ということにな
る。

その時代の通関業務 (関税) は、当時ラナ政府
は全国の要所要所にカスタム・オフィスを設けて、
その地方の有力者に関税業務の全部を請け負わせ

ていた。関税の税率はラナ自身が決め、年間の水揚げ高を一方的に決めて、強制的に税金を吸い上げていた。しかし、それでは請負業者に何のメリットもないので、実際にはラナ政府が決めた税率よりも遥かに高い関税をかけて、大儲けをし、今のタカリの経済的基盤を不動のものにしたのである。

しかし、その後その制度はよくないというので、ラナ朝末期には廃止となった。又、トゥクチェにあったタカリの交易の専売所も、他の種族や農民に対して悪影響が多いという事情が出始めたので、政府の禁止命令が出たのと同時に、ヒットマン・シュルチャンの時代に自発的に廃止されたのである。もちろん現在はこの専売所はない。

トゥクチェの専売所がなくなって以来、タカリの交易収入は減少の一途を辿って来たが、チベットが中国により侵攻され解放されてからは、チベット交易は極端に縮小され、その上ダライ・ラマのインド亡命以後は多数のカンパがムスタンやタック・コーラに流れ込み、チベット奪回の挙に出たため、タカリの主流はほとんどカトマンドゥやポカラ、バイラワへと本拠を移してしまい、トゥク



チェの町は今はゴースト・タウンに変貌してしまった。

タカリはネパールで「長距離貿易」をやっているグループのうち、最も成功した民族の一つといえよう。

スッパ・バルビールの代に始まったチベットとの仲介貿易の専売事業は、トゥクチェの専売所を根城として、百年以上も、所謂トレーディング・センターとしての機能を発揮してきた。

トゥクチェとはチベット語で「塩貿易の地」という意味で、ムスタン交易路はネパール・チベット間の交易幹線路で、古代の「塩の道」を強化したものであった。

山岳文化学会が発足

2003年3月8日(土)午後2時、東京市ヶ谷のアルカディアに於いて「山岳文化学会」の創立総会が開催された。

山岳文化学会は、山岳文化に関する研究、保護、保存と振興および普及を目的として、斎藤一男、近藤信行、西本武志3氏を発起世話人として、昨年9月から毎月準備会を開催してこの日の発足となった。

当日は、会員177名の内、74名が出席して創立総会が行われた。総会は、発起人の山森欣一氏の司会で定足数を確認した後、議長に発起人の大森薫雄氏が選出され議事に入った。発起人代表の斎藤一男氏が開会挨拶と経過報告を行い、発起人の徳久球雄氏が会則の説明を行い、4件の質疑が行われ、発起人の國見利夫氏から役員の提案があり全て承認され、発起人の西本武志が閉会の挨拶を行い創立総会は終了した。引き続き近藤信行氏が「山と日本人」の題目で講演を行った後、場所を

変えて約80名が出席して懇親会となった。

《役員》〔会 長・斎藤一男〕

〔副会長・大森薫雄、徳久球雄、西本武志〕

〔事務局長・國見利夫〕

尚、入会を希望される方の資料請求先は、

〒136-0074 東京都江東区東砂1-1-1-401

國見利夫 ☎&FAX 03-3646-7667



▲創立経緯を報告する斎藤一男会長(左)

地域ニュース

《ネパール》

北大WVOB会がドルジェ・ラクパへ

北海道大学ワンダーフォーゲル部OB会では、今春、ドルジェ・ラクパ（6,966m）へ登山隊（岡博文(26)隊長以下5名）を派遣した。ルートは西稜で3月中の登頂を予定している。

《パキスタン》

同人パハール隊がキンヤン・キッシュへ

同人パハールでは今夏、96年、99年に続いてキンヤン・キッシュ（7,852m）へ3度目の登山隊（飛田和夫(57)隊長以下6名）を派遣する。ルートはキンヤン氷河から西稜（7,350m・未踏峰）を経由して主峰を目指すもの。7月中旬の登頂を予定している。隊長以外のメンバーは、田村正勝(61)、寺沢玲子(51)、坂入年男(50)、山川剛司(30)、平出和也(23)。

6,500m以下は登山料無料

パキスタンは、この数年間に限り、標高6,500m以下のピークに対して、トレッキング・ピークと考へて「登山料を無料」とすると発表した。但し一人当たり1ヵ月ごとに50\$を徴収する。

トピックス

ヒマラヤン・クラブ日本支部総会開かれる

インド・ムンバイに本部を置く「ヒマラヤンクラブ（HC）」は、今年創立75周年を迎えた。これを記念して日本支部では祝賀会と併わせて総会を開催した。出席者は下記の18名。ムンバイの集會に出席した中村保氏が概略を報告。昨夏JACとインドが合同で行ったパドマナブ登山とテラムシェール氷原踏査の様をビデオ鑑賞した。尚、現在日本人会員は66名であり、名誉会員は、松田雄一、大塚博美、吉田宏、稲田定重、尾形好雄。

Books

若き日の山

1952年に創立された『「東京外国語大学山岳部」50年の記録』である。山の世界で「外大」といへば、モンゴルやアンデスでの活動や、三宅修氏、大谷一良氏などその世界で高名な方々が思い浮かぶ。また、青木正樹、江本嘉伸両氏のようにヒマラヤで活躍されている岳人もいるのであるが、不思議と外大が派遣した「ヒマラヤ登山」は聞かない。

作成された年表を見ると、外大によるヒマラヤの高峰登山の記録は見当たらず、わずかに1960年に今やヒマラヤの世界では注目の的となっている「アッサム・ヒマラヤのカンドゥ（7,089m）と「ニェギェ・カンサン（7,049m）の試登」の遠征隊を出す決議をしたものの、入国交渉が進展しないため他に転じ、1964年になって「マチャプチャ



後列左から山森欣一、吉永英明、寺沢玲子、八木原罔明、雁部貞夫、大森薫雄、梶正彦、中村保、大西保、神崎忠男、坂井広志、前列左から松田雄一、伏見紀子、大塚博美、吉田宏、川崎吉光、神原達、吉永定雄

レ遠征計画」が不許可になったと記されている。

ヒマラヤは別として本書には、大学山岳部が通ってきた浮沈が各世代によって書き留められている。向一陽氏が含蓄ある「あとがき」を執筆している。

(記：山森欣一)

A 5 判 350頁 他写真多数 2002年 8 月31日刊
(照会先) 〒206-0013 多摩市桜ヶ丘1-41-1

宮川俊彦方 東京外国語大学山岳会

小説 青春登山大学

1978年、ヒマラヤの話題は、ラインホルト・メスナーであった。彼は春にエヴェレストを無酸素で登り、夏には単独アルパイン・スタイルでナンガ・パルバットに新ルートを開拓した。恐るべき超人の誕生の年であった。同時にこの年は、日本のアルピニズムの最盛時であったと思う。ダウラギリ I の二つの難ルートが日本隊によって開拓された。春のイエティ同人による南稜、秋の群馬岳連による南東稜であった。その他成果は上がった。

また、この年は日本にとっては著名なアルピニスト達を失った年でもあった。1 月、両角泰夫が穂高で雪崩、6 月、亀井建樹がハチンダール・キッシュで転落、8 月、小川信之が穂高に逝き、ガッシュャブルムでは馬場口隆がクレバスに転落、10 月、小暮勝義がダウラギリ I で転落、そして誰もが驚いたことに12月10日、日本最強のクライマーと呼ばれた今野和義が、谷川岳衝立岩を単独登攀中墜死したのであった。享年32歳。

本書は、その今野和義をモデルに据え、山学同志会を青春登山大学として、高野亮が書き下ろした小説。

その今野は小説の中では天馬和義となっており、グランドジョラス、ウオーカーバットレスを冬期単独登攀中、何故か、ご存知のペンバ・ツェリンを救助し、今も青春登山大学副学長として存命している。続きは本書を読む楽しみとして。

高野亮は、1999年に吉尾弘を中心に書き下ろしたノンフィクション「クライマー」の著者である。

(記：山森欣一)

A 5 判 260頁 2000年 3 月20日刊
白山書房 1800円＋税

エベレスト花の道

写真家「藤田弘基」のフラワートレッキングガイド。舞台はエベレストのあるクーンブ山群。コースは、①ドゥド・コシ、②エベレストビュー、③ナムチェ・バザール〜ペリチェ、④ペリチェ〜カラパタール、⑤ペリチェ〜アイランド・ピーク B C、⑥ナムチェ・バザール〜ゴーキョ・ピーク、⑦ナムチェ・バザール〜スーナなど。

藤田が選んだクーンブ山群14座について山森欣一が解説。本書で紹介した138種の花を渡辺高志が解説している。

B 5 変形判 128頁 2003年 3 月10日刊
平凡社(コロナ・ブックス) 1600円＋税

海外登山 氷河をたどって高峰の頂へ

プロガイド鈴木昇己が氷河歩行などを「海外登山テクニック教室」として解説。セルフレスキューテクニックなどを「スペシャルテクニック」として解説。世界の24座のコースガイドを鈴木と早川晃生、大蔵喜福、黒川晴介などが分担解説している。

B 5 判 125頁 2003年 3 月15日刊
山と溪谷社(ROOK & SNOW BOOKS) 1900円＋税

インドヒマラヤ ディオ・ティバ登山隊報告書

登稜会が2002年にディオ・ティバ(6,001m)に派遣した登山隊の報告書。登山隊は日本発〜登山実施〜日本帰国を28日間で達成。登山申請から許可取得の過程が見本を駆使して網羅されている。

A 4 判 46頁 奥付がない

東京集会のお知らせ

日時 4月21日(月)午後7時〜
内容 「白き山河の旅人」を話題に
場所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、J R 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

TIBET TREK

神秘の地チベットへ、幻の花「ブルーポピー」を見に行こう！ HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集

HAJがこれまで過去4回サマーキャンプを実施したニンチン・カンサBCへのトレッキングです。拉薩（ラサ）の街を俯瞰したり、チベット仏教の聖なる湖ヤムドクツォを眺望し、夏の高原をトレックしながら幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しめます。

〔説明会〕4月22日（火）19時、HAJルームにてスライド上映をまじえて質問に答えます。

○料金：395,000円 ○募集人員：15名限定（最少催行人員10名） 定員になり次第〆切

○HAJのツアーリーダー同行 ○問い合わせ先：HAJ事務局

	月・日	都 市 名	交通機関	摘 要
1	7月18日 (金)	成田～成都	CA452	空路、四川省の成都へ。〈成都ホテル〉
2	7月19日 (土)	成都～拉薩	CA4401	空路、チベット自治区の中心地拉薩へ。 〈拉薩／ホテル〉
3	7月20日 (日)	拉薩	専用車	終日、ポタラ宮、大昭寺、八角街などの観光。 〈拉薩／ホテル〉
4	7月21日 (月)	拉薩	トレッキング	拉薩近郊のブンバ・リ(4200m)登山で高所順応。 〈拉薩／ホテル〉
5	7月22日 (火)	拉薩～ランカーズ	専用車	専用車にてランカーズへ。天候が良ければ、途中のカンパ・ラからは青く美しいヤムドク・ツォやニンチン・カンサの雄大な景色が眺められます。〈ランカーズ／招待所〉
6	7月23日 (水)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね4700m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
7	7月24日 (木)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね5000m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
8	7月25日 (金)	ランカーズ～マヨン村～ニンチン・カンサBC	専用車、 トレッキング	専用車にてカロ・ラ(5045m)を越え、マヨン村へ。マヨン村からニンチン・カンサBCまでのトレッキング（約3時間）。〈ニンチン・カンサBC／テント泊〉
9	7月26日 (土)	ニンチン・カンサBC	トレッキング	ニンチン・カンサBC付近のトレッキングとブルーポピーなどの高山植物の観察〈BC／テント泊〉
10	7月27日 (日)	ニンチン・カンサBC～マヨン村～拉薩	トレッキング、 専用車	往路を拉薩まで戻ります。〈拉薩／ホテル泊〉
11	7月28日 (月)	拉薩～成都	CA4402	国内線にて成都まで戻ります。〈成都／ホテル泊〉
12	7月29日 (火)	成都	専用車	終日、成都市内観光とショッピング。 〈成都／ホテル泊〉
13	7月30日 (水)	成都～成田	CA451	空路帰国の途へ。到着後解散。

ローツェ入山者

[1965－2001＝37年間]

(注) 派遣母体後ろの()内は登山隊員＋報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したもの。

[1] 1965年春

早稲田大学 (11)

隊長：吉川尚郎(29)／隊員：松浦輝夫(30)、井口昌彦(28)、鎬木昇(27)、成川隆顕(27)、浜野吉生(26)、村井葵(27)、佐藤辰雄(25)、山本征二(28)、白鳥健二(25)、宮本周二(42)

[ローツェ・シャル(8,400m)に挑戦。8,150mまで到達したが時間切れのため登頂を断念]

[2] 1973年春

神奈川県山岳連盟 (9)

隊長：内田良平(36)／隊員：広島三朗(29)、砂川明久(31)、細野倫也()、大槻豊太郎(29)、多喜田増友()、平井康之()、土屋恒篤()、／報道：田中茂(28)

[ローツェ南壁・南稜から挑戦。5月8日に7,300mに3隊員が到達したが登頂を断念した]

[3] 1976年春

神奈川県山岳連盟 (18)

隊長：亀井貫司(46)／隊員：宮澤章(37)、砂川明久(34)、大槻豊太郎(32)、石川誠(33)、深瀬幸範(30)、富岡征雄(30)、金澤実(29)、丸山正明(28)、浜田次郎(27)、堀重雄(27)、成清直行(26)、福澤卓三(26)、高橋久夫(26)、角倉博(26)、近藤文雄(25)、高口直明(37)／報道：植田簾之助(46)

[1973年に引き続き南壁・南稜に挑戦。5月9日、7,600mに到達したが登頂は断念した]

[4] 1983年秋

カモシカ同人 (12)

隊長：高橋和之(40)／隊員：宮崎勉(35)、山田昇(33)、尾崎隆(31)、村上和也(28)、鈴木繁(30)、香川毅(27)、秦国雄(36)、川田修三(26)、宗時栄(31)、鍛冶真理子(34)、埴勉(36)

[ローツェに挑戦。10月9日、尾崎、山田、村上が登頂。日本人初である。10日、宮崎、香

川、14日、高橋、鈴木も登頂した]

[5] 1986年春

ヒマラヤ同人 (5)

隊長：福島正明(35)／隊員：渡部勲(31)、春木俊秀(24)、荻野由加(20)、佐藤直美(25)

[ローツェに挑戦。5月4日、福島と春木が登頂に成功した]

[6] 1997年秋

日本勤労者山岳連盟 (10)

隊長：近藤和美(55)／隊員：倉橋秀都(37)、桑原巖(61)、永田幸一(39)、橋本久(44)、佐藤賢(44)、長岡健一(43)、末吉和徳(44)、坂本正治(38)、松本高治(37)

[ローツェに挑戦。10月21日、長岡と坂本が登頂に成功した]

[7] 1999年春

ガイアAC (2)

隊長：小西浩史(37)／隊員：銅谷実(31)

[ローツェに挑戦。5月22日、銅谷が登頂に成功した]

[8] 2001年冬

日本山岳会東海支部 (7)

隊長：田辺治(40)／隊員：瀧根正幹(50)、飛田和夫(56)、鈴木幹夫(34)、三好学(34)、大谷日佐夫(32)、花谷泰広(25)

[冬のローツェ南壁に挑戦。7,600m(12/18)に到達したが、落石などのため登頂を断念]

20世紀日本人ローツェ登頂者リスト

	氏名	生年月日	登頂年月日	年齢
01	尾崎 隆	1952. 9. 9	1983.10. 9	31★
02	×山田 昇	1950. 2. 9	1983.10. 9	33★
03	村上和也	1955. 3. 9	1983.10. 9	28★
04	宮崎 勉	1947.11.11	1983.10.10	35
05	×香川 毅	1956. 8.30	1983.10.10	27
06	鈴木 繁	1953. 1.30	1983.10.14	30
07	高橋和之	1943. 1.26	1983.10.14	40
08	福島正明	1950.10.18	1986. 5. 4	35
09	春木俊秀	1961.10.17	1986. 5. 4	24
10	長岡健一	1954. 3.27	1997.10.21	43
11	坂本正治	1959.10. 4	1997.10.21	38
12	銅谷 実	1968. 2. 8	1999. 5.23	31

※ルートは全て西面通常。★印は日本人初登頂。

四川省登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

1) ミニヤ・コンカ (Minya Konka) 7,556m

1. 貢嘎山 (1981年ミニヤ・コンカ7,556m登攀と遭難の記録) 北海道山岳連盟 1982年12月30日
2. 貢嘎の東 (中国四川省大雪山脈貢嘎山7,556m偵察の記録) 北海道山岳連盟 1981年3月1日
3. 手記・さようなら、北壁に逝った友よ (阿部幹雄)「山と溪谷531号」1981年8月号
4. さようなら、ミニヤ・コンカの友 (阿部幹雄)「山と溪谷531号」1981年8月号
5. コンカ山・銀雪の王 (羅仕明)「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
6. コンカで遭難した松田隊員救出記 (曾慶南)「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
7. ドキュメント：ミニヤ・コンカ大生還へのミステリー (徳丸壮也)「山と溪谷546&547」1982年8 & 9月号
8. インタビュー：「ここでは絶対にしねない」(編集部)「岳人423号」1982年9月号
9. ミニヤ・コンカの奇跡 (救出、治療の戦い) 李高中「岳人423号」1982年9月号
10. ミニヤ・コンカ奇跡の生還 (松田宏也) 山と溪谷社 1983年1月20日 900円
11. 手記：ミニヤ・コンカからの生還 (松田宏也・構成徳丸壮也)「山と溪谷552号」1983年1月号
12. ミニヤ・コンカの生と死 (編集部)「岩と雪90号」
13. 山一青春 菅原信・中谷武両君に捧げる 市川山岳会ミニヤ・コンカ登山隊 1984年5月
14. 1982年ミニヤ・コンカ遭難の記録 市川山岳会ミニヤ・コンカ登山隊 1984年5月
15. 登山史を語る山道具 (松田宏也の装備品)「山と溪谷615号」1986年12月号
16. 貢嘎山 (ミニヤ・コンカ7,556m) 貢嘎山実
行委員会1990年6月
17. シャクナゲとパンダとミニヤ・コンカー中国四川省の自然探求トレッキング (富山稔)「山と溪谷668号」1991年3月号
18. ミニヤ・コンカを目指して-HAJ MINYA KONKA EXP 1991-「ヒマラヤ238号」1991年9月号
19. 西康の大地に聳える天壇の山 ミニヤ・コンカ峰登山記「ヒマラヤ242号」1992年1月号
20. 天壇の山に挑む ミニヤ・コンカ東面 日本ヒマラヤ協会 1992年5月
21. ミニヤ・コンカ山麓の海螺溝に行く (渡辺千昭)「岳人555号」1993年9月号
22. ミニヤ・コンカ登山計画「ヒマラヤ274号」1994年9月号
23. ミニヤ・コンカ峰登山と遭難の記録「ヒマラヤ279号」1995年2月号
24. ミニヤ・コンカに消えた4人 (山森欣一)「山と溪谷713号」1994年12月号
25. 魔性の棲む山ミニヤ・コンカ〔上・下〕(阿部幹雄)「山と溪谷714~715号」1995年1~2月号
26. ミニヤ・コンカ西側と康定周辺 (中村保)「ヒマラヤ276号」1994年11月号
27. 未踏峰の誘惑 GWの海外登山、ある雪崩遭難から (難波城行)「山と溪谷707号」1994年6月号
28. ミニヤ・コンカ峰 登山と遭難の記録 日本ヒマラヤ協会 1996年4月
29. 神々しい山 ミニヤ・コンカ (芳賀正志)「岳人601号」1997年7月号
30. 「魔性の棲む山」ミニヤ・コンカ 日本人初登頂の記録「山と溪谷744号」1997年7月号
31. 貢嘎山 札幌山岳会 1997年12月
32. ラモ・シェ (田海子山・6,070m) 登山計画「ヒマラヤ321号」1998年8月号

33. 四川の夏・ラモ・シェ (6,070m) 登山報告
「ヒマラヤ324号」1998年11月号
34. ミニヤ・コンカの輝く微笑み (芳賀正志)
「山岳第93年」日本山岳会 1998年12月5日
35. 中国四川省・ミニヤ・コンカ峰 (7,556m)
一周 (竹内康之) 岳人619号 1999年1月
36. 「天府之国」の最高峰ミニヤ・コンカ登山と
一周のトレッキングを終えて (竹内康之)
「岳人619号」1999年1月号
37. 大雪山脈の秘峰・多漫因峰初登頂 (小川典祐)
「岳人632号」2000年2月号
38. ミニヤコンカ登攀史 (山本健一郎)「山670号」
日本山岳会 2000年3月20日
39. レッド・メイン峰登山報告書 学習院大学輪
仁会山岳部 2000年3月28日
40. 生と死のミニヤ・コンカ (阿部幹雄)「山と
渓谷社」2000年9月2日 1,700円
41. レッド・メイン峰初登頂 (棚橋靖)「山岳第
95年」日本山岳会 2000年12月2日
42. 「魔性の棲む山」ミニヤ・コンカからの生還
(阿部幹雄、松田宏也)「山と渓谷787号」2001年
2月号
43. 氷河に眠る父のもとへ 娘たちのミニヤ・コ
ンカ遺体収容隊 (阿部幹雄)「山と渓谷796号」
2001年11月号
44. 変貌する中国の登山事情。リゾート化された
山岳観光地を訪ねてー四川省ー (羽田栄治)
「山と渓谷804号」2002年7月号
- 2) スークニャン (Siguniang) 6,250m
 1. 四姑娘山1981 同志社大学体育山岳部1982年
10月24日
 2. 壮士征姑娘姑娘愛壮士 鋭峰・四姑娘山の初
登頂 (川田哲二)「岳人412号」1981年10月号
 3. 四姑娘山・やさしい乙女 (羅仕明)「月刊人
民中国」1982年7月号
 4. 中国四川省・四姑娘山群のビッグ・ウォール
を攀る (エリック・パウルマン)「岩と雪106
号」
 5. 四姑娘山の旅 (角田不二)「ヒマラヤ145号」
1983年12月号
 6. 四姑娘山の自然 (山岸喬)「ヒマラヤ150&151号」
1984年5月号&6月号
 7. 四姑娘山の山脈「ヒマラヤ153号」1984年8
月号
 8. スークニャンの山旅 (小林英見)「ヒマラ
ヤ157&158」1984年12月号&1985年1月号
 9. 大姑娘山麓トレッキング (伊佐九三郎)「山
と渓谷社630号」1988年1月号
 10. 遥かなり白き姑娘の微笑み 中国四川省未踏
峰四姑娘山初登頂 (吹田佳晴) 京都通信社
1990年10月 3,000円
 11. 四姑娘の2つの峰「ヒマラヤ254号」1993年
1月号
 12. 四姑娘山南壁へ (吉村千春)「岩と雪156号」
1993年2月号
 13. 美しき谷の姉妹峰 (四姑娘登山の記録) 日本
ヒマラヤ協会 1993年3月20日
 14. 四姑娘山南壁の初登攀 (吉村千春)「山岳第
88年」日本山岳会 1993年12月
 15. 四姑娘山群 (1992年夏の記録) 広島山の会
1994年1月20日
 16. 大姑娘山高山植物の宝庫 (渡辺千昭)「岳人
598」1997年4月号
 17. 知られざる山々 四川省邛崃山群の岩峰群
(中村保)「ヒマラヤ324号」1998年11月号
 18. 中国四川省・邛崃山系の岩峰群 (中村保)
「岳人617号」1998年11月号
 19. 花また花の中国、四姑娘山麓トレッキングと
大姑娘山登頂 (みなみらんぼう)「山と渓谷
786号」2000年1月号
 20. 中国・四川省の未踏の山々 (中村保)「山岳
第95年」2000年12月2日 3,500円
 21. 四川の花園探訪 中国・四姑娘トレック (羽
田栄治)「岳人647号」2001年5月号
 22. 四姑娘山主峰北西壁を初登攀 (中村保)「山
686号」日本山岳会 2002年7月20日
 23. ミック・ファウラーと四姑娘山主峰北壁初登
攀 (中村保)「岳人664号」2002年10月号
 24. ミック・ファウラーと四姑娘山主峰北壁初登
攀 (構成・訳注: 中村保)「山岳第97年」
日本山岳会 2002年12月7日 3,500円
- 3) ゲニ (Geni) 6,024m&ヤンモーロン (Yang
molong) 6,060m
 1. 格聶 (ゲニ) 偵察報告 (山森欣一)「ヒマラ

- ヤ183号」1987年2月号
2. 神の山、ゲニ登山計画「ヒマラヤ189号」1987年8月号
 3. 神の山、ゲニ峰 残してしまった課題（飛田和夫）「ヒマラヤ192号」1987年11月号
 4. 神の山、ゲニ峰 日本ヒマラヤ協会 昭和62年12月1日
 5. 神の山、ゲニ峰—H A J ゲニ峰登山隊計画「ヒマラヤ199号」1988年6月号
 6. 神の山、ゲニ峰初登頂「ヒマラヤ202号」1988年9月号
 7. 白く輝く神の山・ゲニ初登頂（飛田和夫）「山と溪谷638号」1988年9月号
 8. 未踏の秘峰ゲニ初登頂（飛田和夫）「岳人495号」1988年9月号
 9. 雨の山晴の山 秘峰ゲニ初登頂（遠藤京子）「岳人495号」1988年9月号
 10. 神の山 格聶峰（1988年初登頂の記録）日本ヒマラヤ協会 1989年6月12日
 11. 四川省、康南の知られざる山と谷—次なる「新しい発見の旅」へ（中村保）「ヒマラヤ346号」2000年9月号
 12. 中国四川省・康南の知られざる山と谷 新しい発見の旅へ（中村保）「山と溪谷783号」2000年10月号
 13. 川蔵公路の旧道を往く（中村保）「山と溪谷774号」2001年1月号
 14. 党結真拉（ダンチェツェンラ）5,883m初登頂 四川省の隠れた秀峰（阪本公一）「山687号」日本山岳会 2002年8月20日
 15. 康南の秀峰「ダンチェツェンラ」5,833m初登頂（阪本公一）「山岳第97年」2002年12月7日 3,500円
- 4) チェルーシャン (Chola Shan) 6,168m**
1. 中国の未踏峰チェルー山に日中学生合同で14人が登頂（神戸大学・中国地質大学合同登山隊）「岳人500号」1989年2月号
 2. 日中合同登山隊のチェルー山登頂とその意義（平井一正）「山522号」1988年12月号
 3. チェルー山初登頂（神戸大学・中国地質大学〔武漢〕合同登山隊）「山岳第84号」日本山岳会 1989年12月20日 3,500円
 4. 雀児山周辺を探索（中村保）「ヒマラヤ251号」1992年10月号
 5. 碧き湖を抱く雀児山（さがみ家族山の会）1996年11月29日
 6. 未踏の山 カワロレンを訪ねて（山梨県山岳連盟／中国四川省山岳調査隊）「ヒマラヤ345号」2000年8月号
- 5) シャラリ (Xiarali) 6,032m**
1. 桃源境への旅 シャラリ登山計画「ヒマラヤ210号」1989年5月号
 2. 桃源境への旅 もう一つのチベット シャラリ峰登山記「ヒマラヤ216号」1989年11月号
 3. もう一つのチベットへ 桃源境への山旅 シャラリ峰登山の記録 日本ヒマラヤ協会 1990年3月
 4. 四川省の未踏の山群・貢嘎雪山—仙熱日三山（中村保）「岳人632号」2000年2月号
 5. 貢嘎三山花見遊山 中国四川省フラワートレッキング（小野木三郎）「山と溪谷787号」2001年2月号
 6. 笑顔あふれる草原 我が故郷チベットに学校を（李靖・本名は烏里烏沙）「岳人646号」2001年4月号
 7. 花嫁の峰 雲南・四川省の雪山（ピーター・ウェルド／中村保訳）「山と溪谷807号」2002年10月号
- 6) シュエバオ・ディン (Xuebao Ding) 5,588m**
1. 雪宝頂及びその姉妹峰について（鄭榮発）「ヒマラヤ174号」1986年5月号
 2. 岷山の霊峰へ（日中四川雪宝頂合同登山計画）「ヒマラヤ177号」1986年8月号
 3. 天府の霊峰 雪宝頂「ヒマラヤ180号」1986年11月号
 4. 日中合同雪宝頂登山の印象（羅凡）「ヒマラヤ185号」1987年4月号
 5. 天府の霊峰 雪宝頂 日本ヒマラヤ協会 1987年8月5日
 6. 天府の霊峰 雪宝頂を目指して—1991年雪宝頂登山隊計画「ヒマラヤ237号」1991年8月号
 7. 雪宝頂の白い鋭峰（中国四川省・雪宝頂登山隊報告書 さがみ家族山の会 1990. 11. 20

8. 天府の霊峰 雪宝頂登頂－1991年夏の記録－
「ヒマラヤ240号」1991年11月号
 9. 美しい白い峰・小雪宝頂 中国四川省・小雪
宝頂登山隊報告書 さがみ家族山の会 1991
年10月12日
 10. 天府の霊峰 小雪宝頂を目指して「ヒマラヤ
246号」1992年8月号
 11. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 日本ヒマラヤ
協会 1992年12月1日
 12. 日中学生友好登山隊 中国・四川省「雪宝頂
へ」山652号 日本山岳会 1999年9月20日
 13. 日中学生友好登山隊六名が「雪宝頂」に登頂
「山654号」日本山岳会 1999年11月20日
- 7) その他
1. 岷山の秋・1983 中国ナムチャ・バルワ登山
隊強化合宿の記 (角田不二)「ヒマラヤ148号」
1984年3月号
 2. 中国人の岩登り訓練－1983年－「HIMALA
YA日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ」昭和61年9月

- 15日
3. 東チベット紀行 (E・タイクマン、水野勉訳)
白水社 1986年7月5日 2,200円
4. 中国・四川省の魔境“恐怖の死亡谷”探検記
(斎藤克己)「岳人581号」1995年11月号
5. 遥かなる深遠の地 稲城「ヒマラヤ311号」
1997年10月号
6. 未踏峰の宝庫 中国・四川省大渡河流域の雪
山を探る(中村保)「岳人603号」1997年9月号
7. 雪山・石碕・長征の道(上・下) 中村保「岳
人603号～604号」1997年9月号～10月号
8. 未知未踏の岩壁を求めて(中国四川省の岩峰
を初登頂)登山隊報286号 1998年12月号
9. 四川から黄河源流域・青海湖へ3000キロの旅
(中村保)「山と溪谷788号」2001年3月号
10. 四川から青海・黄河源流へ、3000キロー山よ
り歴史の旅が面白いー 2000年10月～11月
(中村保)「ヒマラヤ355号」2001年6月号

山田昇15年祭と「白き山河の旅人」出版記念会

日本ヒマラヤ協会元常務理事で、1989年2月厳寒のマッキンリーで遭難死亡した「最強のクライマー山田昇」の15年祭と、遺稿追悼集「白き山河の旅人」の出版記念パーティーが、下記のとおり開催される。主催者である兄の山田豊氏は「どんなたでも昇を知る方、大勢に参加してもらいたい」と呼びかけている。尚、出版記念パーティ会費には約470ページの遺稿追悼集代も含まれており、当日会場にてお渡しする予定である。参加者は気軽な普段着で、お供物、香典は不要とのこと。出席希望の方は豊氏に連絡が必要。

記

- 第1部 15年祭 (山田昇ヒマラヤ資料館脇の墓地)
平成15年4月20日(日) 午後2時
- 第2部 「白き山河の旅人」出版記念パーティ
平成15年4月20日(日) 午後3時
沼田市「ホテル ベラヴィータ」2F
会費：八千円

※列車利用の場合：東京発12時たにがわ441号
上毛高原着13時15分 バスで山田家へ送り、パー
ティ会場へも送る。帰路は上越線沼田駅へ送る。
沼田発18時32分発 水上20号 上野着20時30分
の予定。

(連絡先) 山田豊 〒378-0005 沼田市久屋町128
☎&FAX 0278-23-0503



H A J 販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録 (H A J 創立35周年記念誌)	3, 5 0 0 円	(4 5 0 円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
3. 秀麗ヌン峰を攀じる (1991年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ (1984年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトバント1990年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
8. “神の河” プラマプトラの激流を下る (1990～1991年)	2, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
9. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 (1991年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
10. 東部カラコルム	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2, 0 0 0 円	(3 1 0 円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
15. ルンボ・カンリ (1994年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1, 6 0 0 円	(2 1 0 円)

■ 寸 感 ■

アフガニスタン問題に続きイラク攻撃で騒然とし、ネパールではマオイストが猛威を振っており、ヒマラヤに安心して出かけられない時代になった。マオイストは銃を携行しており、「金」で解決出来る保証がない現状では「命」の保証はない。心して出掛ける必要がある。

今年は、東のエヴェレスト、西のナンガ・パルバットの初登頂50周年に当る。真中にあるヌンも同年初登頂されており、ヒラリーやプールに勝るとも劣らないランベールやコーガンを想う。

今月号から「ヒマラヤ」の印刷会社が変わりました。中坪印刷さんには長い間お世話になりました。これからは釣巻印刷さんにお世話になります。

(山森)

事務局日誌 (3月)

- 1日～2日 カンペンチン隊合宿 (於ルーム他)
 3日 (月) 国際山岳年日本委員会 (岸体育館)
 山森 (春一番吹く)

- 8日 (土) ヒマラヤ377号発送
 山岳文化学会創立総会 (アルカディア市ヶ谷) 酒井、山森、八木原
 10日 (月) 鈴木昇己「海外登山」出版記念会
 (麴町スクワール) 山森
 外務省から招請人照会
 21日～22日 カンペンチン隊合宿 (早池峰)
 24日 (月) 第三種監査報告書提出
 31日 (月) 東京集会 (10名)

ヒマラヤ No.378 (5月号)

平成15年4月10日印刷 15年5月1日発行
 発行人 山森 欣一
 編集人 山森 欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区千代田2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook>

最新 クライミング技術

ジム・グレンのフリークライミングからセザンヌ、アルバン・ピカソ、ピカソの技術から最新のクライミング技術まで、最新の技術を網羅する。クライミングの歴史、その意味や道徳観、そしてクライミングの未来について、著者の経験から詳しく解説。実践的なクライミングのヒント、心構えなども細かくアドバイス。

菊地敏之 著

1600円

山小屋の主人の 炉端語

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る「人話」の取って置きのお話。

工藤隆雄 著

1500円

すぐ役立つ山の花学

「飛騨高山の花博士」として知られる著者の、山の花見入門書。

小野木三郎 著

1456円

すぐ役立つ山の気象と救急法

山の気象と避難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。

飯田睦治郎 著
桜井博幸 著

1359円

すぐ役立つ記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどれか。

石井光造 著

1300円

山のメモ帳

「岳人」連載の「山の雑学ノート」から55編の話題を取り上げた、山のフチクを深め、安全登山の指針となる冊。

岳人編集部編

1400円

中高年の雪山入門

低山から夢のヒマラヤまで。トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを深めよう。

福島正明 著

1600円

花と歴史の50山

「花と歴史の山」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。

田中澄江 著

1359円

女性ガイドのしなやか登山術

常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける、女性登山ガイドのユニークな登山講座。

樋口英子 著

1500円

新・山靴の音

選遊をわが家へきた著者が山への思い、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著

1262円

中高年登山なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著

1500円

登山の運動生理学百科

「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、わかりやすくまとめた。

山本正嘉 著

2000円

山書散策

今まで数多く発刊された山書、何を读んだらいいか、そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。

河村正之 著

1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外資部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004